

書評

平田清明

『コンメンタール『資本』』

(1, 2, 3, 4)

日本評論社 1980.7, 1981.2, 1982.5, 1983.3 1204 ページ

『資本論』入門風の教科書は相変わらず出版されている。マルクス経済学も「制度化」されるためには教科書が必要となるのであろうが、こうした教科書からは、自己の思想をかけて『資本論』を読むといった気概は伝わってこない。これに対して平田氏のコンメンタールは、数年にわたって『経済セミナー』に連載されてきたものであり、それだけでも驚異的な仕事であるが、更に、そこには著者の一貫した思想で『資本』を読むという姿勢が貫かれている。この点はまず評価されねばならない。全体的な評価としてもう1つ加えておかねばならない点は、この著作がいわゆる市民社会派の原論たる地位を占めるかもしれないという点である。というのは、市民社会派は『要綱』研究に代表されるように、従来『資本』以前のマルクス研究に焦点をあてる傾向が強かったからである。(とはいえ、この原論はかつて宇野の原論が引起こした反響をマルクス経済学全体に与えるかどうか疑問である。何よりもマルクス経済学全体に活力が欠けてきているからである。)

さて、著者の一貫した思想とは何か。それは、近代ブルジョア社会を貫く物象化を批判的に自己了解することであろう。そこでまず、以下の議論に必要な限りで著者のいう「物象化の批判的自己了解」を要約しておこう。(1) まず著者は、資本とか増加価値とかいった日常語を出発点におく。(2) こうした言葉には、実は社会的な形態規定と自然的な内実が同一物として錯視されている。たとえば資本を例にとると、本来社会的関係たる資本が、機械等の自然的なものに等置され(人間の関係の物象化)、逆に機械等が剰余価値(利潤)を生み出すようにみえてくる。そしてそれを要求する人格が資本家であるということになる(物象の人格化)。(3) この物象化を発生論的方法(genesisを解明すること)によって批判的に自己了解すれば、一方では社会的な形態規定を歴史的なものとして相対化し、他方では自然的な内実を解放することができるようになる。(それ故、発生論的方法とはたとえば価値形態論を貫く弁証法というように狭く限定されるのではなく、「始源篇と終結篇とをはるかに結ぶ媒介諸契機は、それ自体が発生論的に展開されるほ

かないものである」(1, 31頁)というように、『資本』全巻を貫く方法となる。)

「物象化の批判的自己了解」という視点が以上のように要約できるとすれば、われわれが平田氏の著作から読みとらねばならない問題は2つある。第1は、著者がかかる視点からいかに『資本』を読もうとしているのかという点である。第2は、はたして著者のいう視点だけで『資本』全体が十分把握できるかどうか、この視点によっては切りすてられることになる部分が残るのではないかという疑問である。しかしながら、1200頁にも及ぶこの大著に対して、かかる問題を全面的に展開することは与えられた紙数上不可能である。そこで以下では、まず第2の点即ち平田氏の視点からは切りすてられることになる部分を、私自身の問題意識から明らかにし、次にそれぞれの関連で平田氏のコンメンタールのうちのいくつかの点を取りあげることにしたい。

物象化または物神性論について、高橋洋児氏は、分析者の立場に立ったものと、経済世界の当事者の立場に立ったものとに区別し、後者の立場即ち……とみえるという倒錯が経済当事者の実践を通じて合理化されていく状態を重視すべきであるとしている。分析者の立場からは倒錯とみえるとしても、当事者にはそもそも……とみえる状態しか存在しないのであって、当事者はそうした状態のなかでしか行動しないのである。そして、その行動(たとえばより大きな利潤を求める行動)は、結果として1つの法則性(たとえば一般的利潤率の成立)をうみだしていくのであって、そうした法則性の認識のためにも、物象化された当事者のおりなす関係の分析が前提されていなければならない。こうした相互前提関係は、『資本』にもみられるから、平田氏の著作でも扱われてはいるが、「物象化の批判的自己了解」という視点からは、切りすてられやすい部分であると思われる。

かかる立場から、次に、平田氏のコンメンタールの始源篇と終結篇とをみてみよう。

(1) 商品論について。いうまでもなく、価値形態論と交換過程論は貨幣形成の必然性と現実性を与えるものであるが、平田氏の場合は商品論全体が商品物神性論を基軸として編成されているので、価値形態論と交換過程論の差は、商品物神性論との関係の差としてもあらわされている。即ち価値形態論では、貨幣形成の必然性が貨幣形態のgenesisを解明する形で与えられるが、それは同時に貨幣の謎を解体することになるから、「価値形態論は、そのものがすでに物神性批判論なのである」(1, 80頁)。これに対して交換過程論では、商品所有者の意思

行為を媒介させて貨幣形成の現実性を与えているが、商品所有者には、商品物神が骨肉化し、その人格を内側から規定しているから、『交換過程』論は、物神性論を欠いては、批判的に語りえないのである」(1, 98頁)。それ故、価値形態論→物神性論をふまえた交換過程論では、もはや謎にまどわされることもなく、「形態Ⅳ→貨幣形態成立の必然性を、商品所有者がその日々の交換行為において現実に実現させているということをベグライフエンする」(1, 136頁)ことができるようになるというわけである。しかし一度貨幣形態が成立すれば、商品物神が骨肉化した商品所有者にとっては、商品がいくらで売れるかだけが問題なのであって、もはや商品所有者が心を1つにして貨幣をうみだすということなどは問題にもならないはずである。(そして、かかる実践を通じて商品物神→貨幣物神が逆に合理化されていくことになる。)いくらに売れるかだけに関心をもつ商品所有者の行為が、結果として商品世界にいかなる機構をつくりだしていくかという問題は、貨幣形態の成立→商品物神性の暴露という問題とは別に説明すべき問題ではないだろうか。価値尺度論をめぐる戦後の論争がこの点にかかわるものであったことは明らかである。更に、平田氏は価値表現の廻り道を「他者なしに自己表現はありえない」(1, 74頁)という点に求めているが、私は、相手に直接的交換可能性という切り札を与える形でしか(私的であると同時に社会的でもある)価値表現は成立しないという点に求めるべきであると考え。この2つの廻り道は必ずしも排除しあうものではないが、後者の廻り道はいうまでもなく戦後の価値尺度論争の延長上にでてくるものである。

(2) 収入とその源泉について。この『資本』の最終篇は、本来『資本』全巻の終結篇にあてられていながら、「この篇の主題が、その章別構成をふくめて問いなおされたことは、これまでほとんどなかったのである」(4, 1108頁)。これに対して平田氏は、経済的三位一体範式が社会関係の物化と物象の人格化という視点から批判的に自己了解された上で、それとの関連で更に次の重要な問題が提起されているとする。1つは、経済的三位一体範式の批判的自己了解にとっては、いわゆるスミスのV+Mドグマへの批判が不可欠であり、そのためには表式分析が不可欠である。ここから著者は、「第三部が形式上は第二部のうえに、これを補完すべき高次元的存在として位置づけられておりながら、その理論内容が、むしろ第二部のための準備草稿でもあ」(4, 818頁)ったという位置づけを与えている。こうした位置づけは、たとえば市場生産価格論等にも使われており、単なる学説史

の問題としてではなく、理論展開上の問題として今後検討されねばならないだろう。もう1つの論点は、第7篇においてたとえば今や「不変資本はもちろんのこと、労賃・利子・地代が費用価格となるのである。……費用価格という概念が、第三部第一篇でのそれ以上に、物象化され疎外されている」(4, 1135頁)とする点である。著者はそのように展開した上で、「しかしこのような概念は、まったく競争の仮象にほかならない」(4, 1137頁)としてしまう。しかし、個別資本が競争を展開する際の行動様式を規定するのは、このような費用価格の概念であって(もちろん、そうした行動が資本物神を逆に合理化していくのであるが)、第3部第1篇のような費用価格の概念ではない。第3部第1篇のような費用価格の概念を前提にする限り、たとえば利子率の高低が資本家の蓄積行動にいかなる影響を与えるかというような問題は、そもそも問題にもならなくなってしまふ。(もちろん、そのような問題など人類史上の古典たる『資本』の扱うべき問題ではないのかもしれないが。)したがって、第7篇で新しく費用価格の概念が与えられるのなら、競争の仮象であることを暴露するだけでなく、その下での競争形態の分析が新しくつけ加えられねばならない。もちろん、そうした分析は、『資本』第三部第一・二篇での利潤・平均利潤・生産価格・市場価値の諸テーゼ」(4, 1108頁)を否定するものではないが、そうした諸テーゼの背後にある費用価格の概念や競争の形態とは次元の異なるものである以上、より豊富な内容をそれらの諸テーゼに与えることになる。たとえば『資本』第3部第5篇第25章以下にはそのような分析がみられるのである。そうした意味でも、著者が強調するように、『資本』は未完の書ではないだろうか。

まだ言及すべき多くの点が残っているが、それは、今後の本格的な検討にまかされるべきであろう。そして、本格的な検討に値する著作であることを最後にもう一度確認しておきたい。

〔安井修二〕